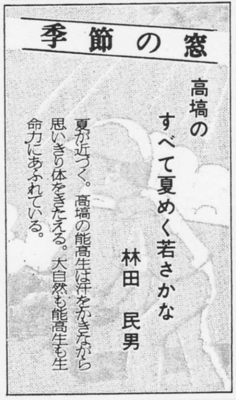
校友時報

昭和60年6月14日
編集人兼発行人
秋田県能代市高塙2番1号
秋田県立能代高等学校新聞部
印刷所　㈱大勝堂印刷

季節の窓



高塙の
すべて夏めく若さかな　林田　民男

夏が近づく。高塙の能高生は汗をかきながら思いきり体をきたえる。大自然も能高生も生命力にあふれている。

不満残した生徒総会

５月９日の４校時、60年度定例生徒総会が行われた。今年度も昼休みに35分食い込むという昨年同様長い総会となったが議事の進行のあり方について執行部側のミスもあり不満を残す総会となった。

問われる総会のあり方

陸上部の石炭は何に使うのですか

開会宣言のあと、議長に佐藤誠君（三G）、副議長に小泉亮君（同）が選出された。

続いて、五十九年度の決算案、六十年度の予算案がそれぞれ審議され、若干の質疑応答の後両案とも反対者少数によって承認された。（今年度は承認を求めるとき反対者の挙手の採決方法を採用）

なお、主な質疑として▽校内弁論大会の実施の有無▽生徒会で行う六十周年記念行事の内容について▽慶弔費の使途について▽総体の昼食代削除の件▽予備費を使わない理由、などがあげられた。それらに対しての主な答弁は、▽生徒会独自では六十周年の記念行事は考えていないが、能高祭で生徒会との協賛により、実行委員会が記念の企画を行う予定である。▽慶弔費は、生徒の家庭に不幸があったとき、本校に在職した先生の人事異動のときなどに使う。▽昼食代は、生徒会旅費規定にあるように出ないのが原則で、昨年までは予算に余裕があったので出していたが、今年はその余裕がないので不可能であること、などであった。

また、会員から、「緊急動議が提出されたにもかかわらず、それを議題として採択し、その可否を計らなかったので行って欲しい」「承認要求のとき、今回の様に反対者挙手ではなく、賛成者挙手にしてもらいたい」など議事の採決に対する異議がさしはさまれたのに対して執行部側は、「反対者挙手による採決方法は昨年同様である」という説明をしたが、この方法は今年始めて採用したもので、説明に真ぴょう性が欠けていたりさらに、一般質問の場を設けなかったなど、総会の進行上において執行部側のミスが目立つ総会となり、会員の不満と非難の声が残るなかで閉会するというあと味の悪いものとなった。

部説

道徳心を大切に

今年のゴールデン・ウィークは桜の最盛期と重なり各地で花の盛りを楽しんだ人も多かったことと思う。私も御多聞にもれずに、今年は弘前まで足を運んだ。弘前城公園をうめつくしている桜の見事さに少々興奮気味でさえあったが、弘前城に入ってその興奮も少しさめてしまった。というのも、弘前城はいたずら書きでいっぱいだったからだ。

そのいたずら書きは、自分の名前・住所のPRや相々傘といった類で、手の届く所ならどこにでも。〝いたずら書きをしないで下さい〟というプレートの周りまでもうめつくされていた。弘前城が公開されたのが昭和二十九年というから、かれこれ三十年近くもずっと書き続けられてきたのだろう。

いたずら書きには一種の魅力がある。普段は公然と言えないようなことでも、堂々と書ける。それに心理的にたくさんあると、ついつい誘われて書き込んでしまうということもある。しかしそれはただ「魅力」ですましてしまっていいことだろうか。これは昨年の本校の話であるが、家庭科室のテーブルのいたずら書きがあまりにもひどいため、作業にさしさわりがあるというので、テーブルの天板を張り変えて、多額な経費を費やした。ここに私達の公徳心の欠如がみられるが、この公徳心については今さら言及するには及ばないと思う。それより、いたずら書きといえども修繕するとなると多額の費用を要することがある。私達は、その後にどういう損失があるか、ということには無頓着な面がある。

『今の若い人は…』という非難の声の中の一つに、この私達のルーズな面を指摘する『物の大切さを知らない』というのがある。これは日本が60年代に高度経済成長の波にのり、〝使いすての時代〟とよばれる時代に入り、物の価値感がなくなったためだと言われている。次から次へと出回る新しい物を追い求め、古い物への愛着心がなくなってしまったのだろう。その結果があの弘前城のいたずら書きにあらわれている。家庭科室のテーブルは費用はかかってもなおせたが、文化財のようなものでは汚くなったからと言って簡単に補正するわけにはいかない。そんなことをしたら由緒ある場所が台無しになってしまうからだ。古い物の価値が失なわれてしまう。文化財的なものには歴史の記録が刻まれていて、なににも換えがたい価値がある。その価値の高い物を大切にする気持ちを、公徳心とともに持ちたいものだ。

はかどる準備

—能高祭—

「破天荒」をテーマに、六月二十九日、三十日の両日、能高祭が行われる。なお、各部門の責任者は次の通りである。

能高祭実行委員長	藤原孝一	（三F）
副委員長	福司宏治	（二B）
総務	藤原孝一	（三F）
	桜木伸英	（三F）
会計	大和浩美	（三F）
渉外	佐藤　誠	（三G）
	伊藤孝義	（三G）
案内	加藤知徳	（三F）
	佐々木勝	（三B）
	嶺脇美貴子	（三A）
警備	柴田洋一	（三A）
装飾	川村女久美	（三G）
売店	藤盛伸一	（三F）
喫茶	谷内　崇	（三B）
食堂	年代信弥	（三G）
H・Rデコ	藤田祐紀	（三F）
クラブデコ	松橋文仁	（三F）
前夜祭	松橋博昭	（三C）
ステージ	小津宏樹	（三A）
	野中正裕	（三A）
	日沼良樹	（三F）
後夜祭	秋田法俊	（三F）
	小泉　亮	（三G）

進路状況

増加傾向の専修志望

六十年度の進学状況は別表のとおりで合格者は浪人生を含めて三六二名であった。実進学者は三三八名で去年の二七六名を上回った。国公立大の主な大学別合格者数は、秋田大三三名、弘前大八名、東北大六名、これに北海道大、北海道教育大、筑波大学が各三名、東京学芸大、岩手大が各二名となっている。今年もまた秋田大の合格者が目立って多い。その中でも現役が教育学部に受験者数二〇人中十九人合格と最も多く逆に鉱山学部は十九人中わずか十人合格者を出したにとどまった。これについて進路指導の小玉（孝）先生は、「今年は一次の成績が予想より良かったために志望を変えずより上位校を目指した生徒が多かった。しかし上位の学校は二次重視となるので現役には不利となりその結果失敗する人が見られた。秋田大の教育学部は一次重視、鉱山学部は二次重視となるのでこれらのことがはっきり現れたといえる」と語られた。

一方私立大の主な学校の合格者数は、東北学院、秋田経法大が十六人と最も多く、次に東京理科大、東洋大が十一人、日本大、東北福祉大が九人、神奈川大、早稲田大が七名の順になっている。これについても小玉（孝）先生は、「今年は、上位層の生徒が多かったため、良いところに入った人が多かった。逆に中堅校への合格者が例年に比べて減ったようだ」と語られた。なお今年の進学者数は昨年と大差はないものの各種専修学校の人数は今後も増えると見られている。

就職者は昨年より十人減少して四十三名となった。そのうち県内就職者が十七名と去年より下回った。県内の主な就職先は、NTT三名、能代市役所三名、消防署三名、郵便局二名となっている。

進路状況

	59　年		60　年	
	合格	進学	合格	進学
国公立	85	76	70	61
私　立	245	136	219	122
小計	330	212	289	283
短　大	28	23	26	15
各種専修	43	41	47	40
合計	71	64	73	55
	県内	外	県内	外
就　職	23	30	17	26

軽快で躍動的な応援

去る、四月三十日、硬式野球市内リーグ対能代工業戦の全校応援が行われた。当日は天候に恵まれ、絶好の応援日和となった。

今回は、今まで行って来た応援方法に、春休みに早稲田大学応援部から二人の講師を招いて合宿を行い特訓した「早稲田カラーの応援」を取り入れた。軽快で躍動的な応援を繰り広げた。しかし、一般の生徒達は、今一歩リーダーとの連係に一体感がなく、生徒全員が一丸となっての応援とまではいかなかった。

今回の応援方法について、「おととしや、去年に比べると、幹部がかなりやる気を出していて、応援と応援とのあいだに間のびが解消されてスピーディーになった。しかし、マネージャーの人数のわりに、応援を指示するカードの数が足りなかった。そのため、端の方にいる人にまで何をやるのかが伝わらず、応援にも身が入らないことが多かった。」という声もきかれた。

また顧問の袴田先生は、「幹部は練習の成果を発揮して良くやっていたようだったが、一般の生徒がもう少し頑張ってほしかった。」と語っておられた。

ギリギリ登校目立つ

四月十五日（月）から二十日（土）までの六日間にわたって、校門指導が実施された。

今回の指導の重点目標は、服装・遅刻などの生活規律の確立、自転車の安全通行の二点であった。指導にあたられた先生は、「初日はぬきうちに近い状態だったので、カラーのない生徒やえり章のない人が目立った。あいさつはわりとよかった。それから遅刻者が思ったほど多くなかったが、授業開始ギリギリに登校してくる生徒は多かった。これは、学年が進むにつれ増えている。また、あいかわらず自転車の傘差し運転や、二人乗りが目立った。生徒たちは、どうしてこれらのことがいけないのか早く気づいて欲しい。そしてお互い注意しあって欲しい。」と語ってくれた。

遅刻だ！遅刻だ！

出来事

講習

今年度の私大説明会が、約百数十名の三年生を対象に五月二十九日、代々木ゼミ仙台校の進路指導小坂敏雄氏を講師に行われた。

小坂氏は「大学入試は年間スケジュールとの競争である。また確実に点を取れる科目が二つはなければ中堅校（日本・東洋・駒沢・専修大学など）の受験に対応はできない。」など八十分間にわたって語られた。

防災

五月二十四日、全県一斉に防災訓練が行われた。これは日本海中部地震の惨事を二度とくり返すまい、という主旨から実施されたものである。それに準じて同日、本校でも避難訓練が行われた。しかし緊張感に欠け、物見遊山的ですばやい行動が見られなかった。防災担当の嶋田先生は、「地震の恐怖がだんだん忘れられてきているので、年に一・二回は行い、気持ちを喚起していきたいものだ」と語っていた。

焦点

▼第71日東丸乗り組員三人の生還は、まさに〝奇跡〟と呼ぶにふさわしかった。十六日間流氷の海にとざされ、ただ生きて帰る事だけを考えていた。この間、彼らはまさに生と死とのはざまにいた。▼沈没当時、船には十六名の乗り組員がいた。しかし、かろうじて救命ボートに逃れることが出来たのは、わずか五人だった。数日後、非常食も底をつき五人いた乗り組員も二人亡くなり三人となってしまった。「生きるためには、何でも取って食べよう！」と誓い、カモメを捕まえ素手で皮をむき生肉を食べたという。▼漂流中はただ「死んでたまるか、生きて帰るのだ。」と心の中で何度も言いきかせていたという。このすさまじい〝生〟への執念が、乗り組員を死の一歩手前から引きもどさせる事が出来たのである。▼今回の事件で私たちは人間の〝生〟にかける執念と、生きることのすばらしさを教わった気がする。▼ここ数年、少年少女の自殺が年々増え続けている。これら増え続ける自殺の理由はいづれも明らかではないが、自分一人で悩み、孤独となり自分自身を考えることが出来なくなり、つい衝動的に死を選んでしまうのだろう。この件についてある神経科医は「今の子供は、人生というものを非常にクールに見通している。人生とはこの程度のものか、と考えてしまう。」と語っている。まさにその通りではなかろうか。些細なことで人生を見限ってしまい、生きていく気力を失う。そして、あげくのはてに死を選んでしまう。▼これはあまりにも命を軽く見ている気がする。自分の命がどんなに大切なものであるかをもっと考える必要があるのではなかろうか。▼先に述べた日東丸の沈没事件は、こうした若者たちにも生きる事への執念のすさまじさを、痛切に教えてくれたに違いない。この乗り組員の〝生〟に対する執念を、私たちは心に強く留めておく必要があるのではないか。